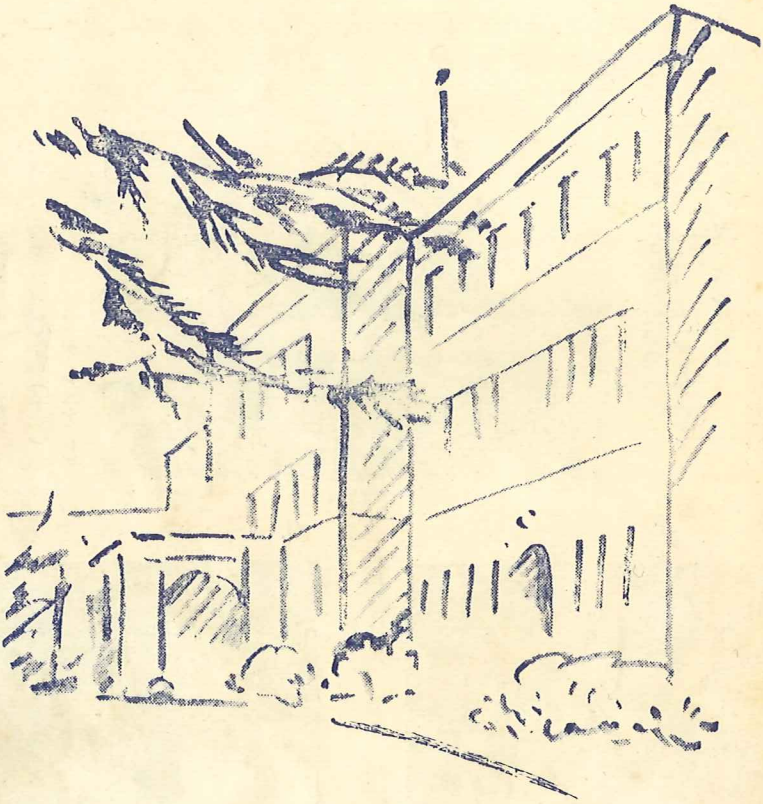
成蹊會誌

第十四号



—1958—

伊豆の住人)。で、目を通して、二、三カ所一寸直したが大体よかつた。暫く伊東に住んでいたので、伊東方面の方言は大体飲込んでいた。その小説は、伊豆の若い漁師と島の娘とのロマンスで、格別新味のある作品ではなかつた。雑誌〝ロマンス〟に投稿するんだとの話だつた。

当時〝ロマンス〟は東京タイムズの傘下の雑誌で、発行部数日本一を誇つていた。しかし、幾月たつても、下条の作品は誌上に表れなかつた。その後日比谷で会つた折「あの作品は?」と聞いたら「いや、あれが入つたらたいしたもんだよ、出したがやつぱり没さ」との返事。「編集長さんのでもか?」と、笑いながら云つたら、僕に応える代りに、傍に在つた記者に「編集長、ついに作家たり得ず……と云うところだねエ、君」と、ハハハと笑い合つた。そして、市政会館の地下室のレストランに行つて、その記者も交えて三人で、ビールで選没祝賀(記者のことば)の杯を重ねた。

○　○

「閑暇が出来たらぜひ、釣に行きたい」と、去年の秋、便りがあつたが、釣にもやつて来ず、ついにそれが下条からの最後の便りとなつた。(年賀状はもらつたが)。東北風の雅趣のある、友情のあつい男だつた。在学中、二人で旅行した潮来の宿の思出、初めての神楽坂清遊……と思出は尽きない。まだ六十にはならなかつた。またまだ少くも数年は、新聞人として大いに活躍を続けただろうと思つていたのに、惜しいことだ。友達の一人、一人、去つて行くのはほんとに淋しい。(専門三回)

物故会員

宮本覚純先生(特別会員)昭和三十二年十二月三十日逝去
御遺族　岐阜県関市下有智　宮本春恵

中村甚八郎先生(特別会員)昭和三十三年一月十六日逝去
御遺族　郡山市菜根屋敷一八三　秋田陽一郎

今村信吉先生(特別会員)昭和三十三年一月二十八日逝去
御遺族　武蔵野市吉祥寺二八四　今村知雄

和田吉蔵君(中学八回)昭和三十二年二月十三日逝去
御遺族　東京都中央区日本橋横山町八　和田廉子

下条雄三君(専門三回)昭和三十二年三月九日逝去
御遺族　東京都杉並区高円寺五〜八五一　下条順

藤原浩君(高校十八回)昭和三十二年三月二十七日逝去
御遺族　武蔵野吉祥寺二八五六　藤原雅子

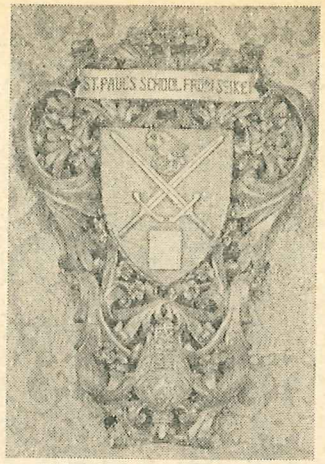
岡野拓君(高校六回・中学十三回)昭和三十二年四月三日逝去
御遺族　浦和市北浦和二〜七三　岡野恒子

田中勇君(高校二回)昭和三十二年四月二十日逝去
御遺族　千葉市作草部町九三八職宅二ノ六号　田中加奈江

滝孝吉君(高校十二回)昭和三十二年十二月二十四日逝去
御遺族　東京都世田谷区北沢三〜八七七　滝光子

萩尾篤君(高校七回)昭和三十二年十二月三十日逝去
御遺族　東京都世田谷区代田二〜八八六　萩尾富美子

セント・ポールズ通信



成蹊会からセントポール校に贈られた楯

セントポールズ・スクール留学生派遣については成蹊会誌十三号で御紹介致しましたが、その後成蹊高等学校職員会議で人選について慎重審議の結果三年在学の大久保基君が選ばれ、次いでセントポールズ留学生選考委員会(委員・国際キリスト教大学教授清水護氏、成蹊高等学校長若林秀善氏、セントポールズ校卒業生代表ジョーチ氏並びに槇原稔氏、成蹊会代表石坂泰彦氏、並びに谷岡常務理事)において若林高校長より大久保君推薦に至る経過報告がなされた後、同君と面接、全員異議なく賛成致しました。本会においてはこれに基き、育英奨学選考委員会を開き、渡米に要する旅費並びに支度金を支給することに決定し、昨年七月二十一日、横浜出帆の三菱海運コロンビヤ丸に乗船、留学の途についた次第です。なお特筆しておきたいことは三菱海運におかれましてはこの事業に賛同され横浜港からロス郊外ロングビーチ港迄の船賃を免除(食事代のみ支払)下されたことに対し感謝の意を表する次第であります。

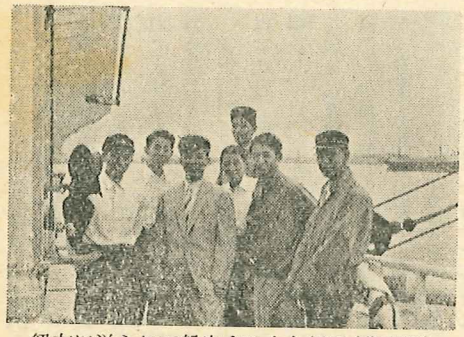
(谷岡記)

セントポールズ通信(第一信)

大久保基

見渡す限り軽く起伏する山々は一面の紅葉にもえ、所々に此の地方独特の白く塗られた木造の家が浮きあがつて見られる……私がアメリカにつきボストンから更に七十哩程北のセントポール校に始めてきたのが丁度此の頃で図書館を囲む池の水面は赤と黄の葉に隠されていた。……

槇原稔氏の名文を読みながら、胸を想像で満たして躍らせていた、セントポールズ校にとうとうやつてきて、その空気を自分の肺で感じました。それから一ケ月、随分ごぶさたしました。


級友に送られて船出する大久保君(背広姿)

成蹊会のお世話で三菱海運の貨客船コロンビヤ丸に便乗でき、七月二十一日横浜出航以後二週間の船旅は実に楽しいものでした。海も静かで、船路の最北端あたり(N 47°)では鯨のしおふきを見たり、航海中一度同社船に出会い、歓呼の交換等、色々と面白い事を経験、八月四日にロングビーチ港に入りました。ロングビーチでは成蹊高校出身の大淵正氏(大洋漁業勤務)が来て下さり、ロス滞在三週間中並々ならぬお世話になりました。そこからサンフランシスコ。四、

五日過ごして、いよいよ大陸横断へと旅立ちました。丸一日かゝつてやつと通過する砂漠に、さすがアメリカは広いとつくづく感じました。途中アイオワ州のスーシティーと云う所の奥のアメリカ人の農場で一週間過ごすと云う好運があつて、牛乳しぼりや乾草作り等の機械化された、アメリカ農法を実地に験しました。その後シカゴを通りニューヨークへ来たのは九月四日午前八時、アメリカ着岸後丁度一ヶ月ぶりでした。ニューヨークでは姉に二年ぶりの対面をし感激しました。又この六月迄セントポールズ校に勉学ハーバートで物理を研究している平井敏道さんが色々と面倒を見て下さり、セントポールズ迄連れていつて下さいました。

セントポールへ来たのは九月十三日、学校は委員の最上級生と先生方を除いてひつそりしてました。槇原さんの表現通り。すでに木の葉は色ずいて、池に映していました。学校が始まる迄リー先生と云う化学主任のお宅に泊まらせて届きました。

広い田舎に点々と建物が散らばつて、二つの池に静かに横たわつている。これがめざすセントポールズ校なのだと信じられないみたいな気持にかられながら、学校の始まりを待つていました。

セントポールズ通信（第二信）

新年おめでとうございます。異国の地では日本に於ける〝正月〟と云う感じには程遠く、恰度ニューヨークタイムズ社の屋上にある大ネオンがその瞬間に1957から1958に変わる程度しか感じられません。新年を迎え気持を新らたにする意味で、日本の正月の風習はいいものだと思います。

さて、学校は九月十七日から丸三ケ月、十二月十八日の朝早く、帰郷の生徒のために十台の特別バスが学校からボストン迄走りました。

この一学期間、人間のもつ物の中で、〝ことば〟と云う物がいかに生活の中で大きな位置を占め、いかにそれを発展させるために大切であるかと云う事をまず実感致しました。

英語のことです。でも先生も友達も、僕の日本英語には随分悩まされたとすまなく思つていますが、皆真剣に理解しようと努めてくれ、無事楽しく三ケ月を送る事ができました。

学校が始まつた頃から広い校内の木々が色づき始め、十月の半ば頃はなんとも云えぬ程美しくなりました。木が高く、まつすぐしている事から、日光あたりで見る紅葉とは又違つて雄大さがあります。でもこのあたりは常緑樹が少ないため、冬は雪が降らない時は実に寂しい景色しか目に映りません。学校内にある三つの池も薄氷が一面にはつて、春遅く迄、冬が重く空から垂れさがつている感じが致します。

セントポールズは朝六時四十分のベルで一日の日課が始まります。七時五分に朝食で、歩いて十分位ある食堂迄走り、その後教会堂で礼拝があり、授業が始まります。午前四時間十分の間に五時限あり、各自の選んだ課目に従つて、教室をかわつていきます。授業と云つても、各自の勉強（これは宿題として、毎日各課目与えられます）に対する概略の説明と、色々な問題（必らずしもその課目に関連しなくても）を討議しあいます。一クラスが八名から多くて十五名くらいから成り立ち、クラスによつては八畳ぐらいの大きさの部屋で丸テーブルを囲んで授業があります。

生徒に任せられた勉強に対しては、試験がひんぱんにありますが、あまり教室でくりかえしをしません。少数をのぞいて皆よく勉強に励げんでいます。

午後からは皆背広から各クラブのユニフオームに着かえて、運動場に飛び出します。

広い土地に五、六の競技場があり、フットボール、サッカー、クロスカントリー（二・五マイル競走）とにわかれ、球を追つたり、山の坂をかけのぼつたりして試合に備えます。

それが二時間ほどで、その後又二時限の授業があり、腹をすかして、夕食を喰べにかけこみます。

食事が終ると約三時間は自由に勉強したり、レコードを聴いたりできます。

消燈が十時半と云うのは、いかにも残念ですが、親から子供を託されている先生方の思いやりであると、ほとんどが守つてるようです。

週日はともかく一日スケジュールがつまつており、土曜の午後と日曜にセルフインタレストをあてられます。ただ日曜は教会に行く事になつており、強制はされませんが、日課として必ず出なければなりません、あまり窮屈な様ですが、一応自分で楽しむ時間もあり、却つてハリがあつて面白い毎日だと思つています。

では又、今年もよい年であります様祈つて居ります。

（一九五八・一・二）

セント・ポールズ短信

（その一）

こちらは木の葉がほとんど散り終つて、冷めたい風が青空に残つている葉を吹き上げています。

僕はすごく元気で、ここの生活を enjoy しています。先週の金曜（十月十一日）に清水先生がいらつしやり、ウオーレン校長始め各先生方ともお会いになり、成蹊関係のと日本紹介のスライド（先生持参の）会は好評でした。その日曜日には先生を学校内、僕の知る所を案内しその日の夕方帰られました。

今頃こちらではアジアの流感の予防注射をさせられています。人工衛星の事で、二、三日朝早く起こされています。成蹊の観測は大部すごかつたらしいですが成果が待たれます。（一九五七・一〇・二〇）

（その二）

流感が又流行つているとNew York Times に出ていましたが、成蹊はどうですか。成蹊の並木の樺のどこかの一枝に最後の一葉がゆれているのを想像しながら、時の過つのは早いものだとつくづく感じています。本当についこの間出たと思つたらもうお正月の声がかかる頃となつてしまいました。もつとも、ここでは「お正月」つて感じより〝New Year〟と云う語の感じしかしないだろうとは思いますが。

この間始めてボストンへ下り、元成蹊父兄の柳父先生のお宅を訪ねその折ハーバートに寄つて有馬氏に会い、楯がようやく成蹊会贈呈の着いたので、その内 St. Paul's へくるとか云つておられました。

十一月二十八日は今年の Thanks Giving 祭で楽しい一日でした。スケートのシーズンで、僕もなれないながら暇をみて、友達に手をひいてもらつています。

あと十日ほどで期末のテストがあり、十二月十八日から一月六日迄クリスマス休暇に入ります。そうしたら又セント・ポールズ便りを書きます。（一九五七・一一・三〇）